

# 『トリスタン』における原典言及

—maere/âventiure/istôrjeを巡って

maere/âventiure/istôrje: Literary Sources of Gottfried von Strassburg's "Tristan"

一條 麻美子  
ICHIJO, Mamiko

## 1. はじめに

中世ヨーロッパ文学において、その評価の基準が「原典への忠実さ」であったことは広く知られている。中世における詩人、とくに物語を語る叙事詩人の仕事とは、これまで誰も聞いたことのない新しいストーリーを創造することではなく、語り継がれ書き継がれる物語の伝統に寄り添いながら、それを新たな語りで世に披露することであった。中世ドイツのトリスタン詩人ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク (Gottfried von Straßburg) が、そのようなある種の「制約」に厳密に従いながら、詩作において作品の「正しき語り」をことあるごとに強調していたことはよく知られている。

彼はまずプロローグで、実際の詩作活動の前に「トリスタン物語」<sup>1</sup>を正しく伝える原典探しに尽力したことを語る。

私はよく知っている、トリスタンについて語った者は多くいた。しかし彼について正しく語った者は多くはなかった。だがいま私が、この物語 (maere) についてのそれらすべての語り (sage) が気に入らないかのように申し述べるとするなら、それは私にとってふさわしい振る舞いとはいえないであろう。そんなことはしない、彼らはみな高貴な心持ちから、私やその他の人々のために良く語ってくれた。彼らはまさに良き志を持って語ったのであり、なんであれ良き志で為されたことは、褒められるべきなのである。しかし私が彼らは正しく語らなかつたと申し上げたのは、つまるところこういうことなのだ。彼らはブリタニエのトマ、物語の名人 (der âventiure meister) であり、ブリトン語の書物で (an britûnschen buoche) あらゆる君公の生涯 (aller der lanthêren leben) について読み、それをわれわれに語ってくれたあのトマが語ったような正しさをもっては語らなかつた。トマがトリスタンについて語った真実の正しき物語を、私はロマンス語とラテン語の双方の書物で探し、トマの正しさに倣い、この物語を正しく語ろうと努めた。私は膨大な調査 (manege suoche) の末、ついにある書物で (an eime buoche) こ

1 本論ではトリスタン物語一般を「トリスタン物語」、個々の詩人の作品を「トリスタン」と表記する。

2 ゴットフリート『トリスタン』の引用はGottfried von Straßburg: Tristan und Isold. 15., unveränd. Aufl. Zürich 1978.に  
より、拙訳を付けた。

3 トマ『トリスタン物語』ドゥース  
写本断片、835行以下。新倉俊  
一訳。『フランス中世文学集1』  
白水社、1990より。

の物語 (dirre âventiure) がいかようであったのか、彼の語り (sine jehe) のすべてを読むことが出来た。この恋物語について (von disem senemaere) 私が読んだところを、私はすべての高貴な心の持ち主に喜んで披露しようと思う。それでもって彼らが無聊を慰めるようにと。(v.131-171)<sup>2</sup>

ゴットフリートによれば、トリスタンについて物語った作品は多数あった。確かに写本が現存しているだけでも、ゴットフリート以前の作品として俗人本系のベール、アイルハルト・フォン・オーベルク、騎士道本系のトマの作品があり、それらは互いに取り上げるエピソードや語りぶりに少しずつ異なる部分を持っている。その中でゴットフリートの判断によれば、「正しいトリスタン物語」といえばトマのヴァージョンであり、「膨大な調査」の結果、「ある書物」でトマの「語りのすべて」を見つけることが出来たというのである。

そしてさらにそのトマ自身、トリスタン物語を創作するに当たり「ブリトン語の書物」に書かれた「あらゆる君公の生涯について」読んでいたという。つまりゴットフリートが唯一の「正しい語り」であるとするトマの『トリスタン』の背後には、トマが参照した「トリスタン物語」の伝承のみならず、トリスタン以外の人物も含めた「あらゆる君公の生涯」についての記述があったのである。

正しく語ったとゴットフリートに名指されたトマはと言うと、やはり自身の原典について次のように語っている。

そもそも昔からトリスタンの物語を世に語り伝える者たちは、さまざまに語っているのだ。現に私は何人も人の話を聞いた。彼らのそれぞれが語ったことも、書物にしたこともよく承知しているが、私がこの耳で聞いた限りでは、かつてブルターニュに存在したすべての王、すべての伯の忘れがたき武勲とその物語に通暁した、かのブレリに基づいて語ってはいない。(v.841-851)<sup>3</sup>

このトマの記述が、彼を師としたゴットフリートの記述と酷似していることは明らかである。トマ／ゴットフリートとも、「トリスタン物語」を正しく語るに当たり、王侯の事績による裏付け、つまり歴史の知識が必要であることを強調しているのである。騎士道本系トリスタン物語の大きな特徴はここにあると筆者は考える。

それではトマ／ゴットフリートの「トリスタン物語」にとっての歴史とは、どのような意味合いを持っているものなのだろうか。本稿ではゴットフリートが作品中、どのような場面で原典言及を行い、何をとくに「真実」として聴衆／読者<sup>4</sup>に示そうとしたのかを考えな

がら、「トリスタン物語」における歴史の意義について明らかにしていきたい。<sup>5</sup>

## 2. ゴットフリートにおける「原典」

ゴットフリートはプロローグにおける上記の原典言及に加え、作品のおりおりに「原典によれば」というような文言を挿入し、彼の記述が「正しい語り」を外れていないことを強調している。その姿勢は例えば次のような言い回しに見て取れる。

ルーアルはブランシェフルールをカノエール城へ連れて行った。この城の名は私が読んだところによると (als ich ez las) 彼の主君 (リヴァリーン) の別名カネーレングレスに由来する。(v.1642-1646)

主馬頭 (ルーアル) とその徳高き妻 (フロレーテ) は、私が読んだところによると (als ich ez las)、誠の王冠を戴いていた。(v.1799-1801)

しかし、私が読んだところによると (als ich ez las)、その幸福には絶え間ない不幸が混じっていた。なぜなら彼 (トリスタン) は苦悩の星の下に生まれていたのだから。(v.2128-2130)

その他「私が聞いた通りに (alse ich hân vernomen v.5179)」、「この至福の女性 (フロレーテ) について私が読んだところの (die ich von der saeligen las v.5259)」、「その外衣は私が語られるのを聞いたところによれば (alse ich hörte sagen v.6554)」など、多少のヴァリエーションが見られる。

これらの表現では、ゴットフリートが何を読んだ／聞いたのかは曖昧であるが、対象が名詞で明らかにされる場合もある。

当時アイルランドの王であったのは、私が istôrje で読み、また正しい maere が語るところによれば傲慢王グルムーンであった。(v.5879-5882)

というのも傷を負った男 (ウルガーン) は、maere がわれわれに語るところによると、切り落とされた手を広間の机の上に置いて、城から谷へと走り下ったのだ。(v.16100-16104)

彼女 (イゾルデ) がそうしたのは、maere がわれわれに語ると

4 中世文学の受容形態は「朗読を聞く」「書物を読む」など多様であったが、本稿では便宜上、受容者すべてを合わせて「読者」と記述する。

5 ゴットフリートの原典については Werner Schröder: Die von Tristande hant gelesen. Quellenhinweise und Quellenkritik im »Tristan« Gottfrieds von Straßburg. In: ZfdA 104(1975). S. 307-338. を参照した。

ころによると、憧れの悩みを新たにするため、トリスタンへの愛のためであった。(v.16353-16355)

この *istôrje* や *maere* と呼ばれるものこそ、ゴットフリートが文献調査の結果「正しい」伝承、「原典」と判断したテキストであると考えられる。それでは以下、「原典」を示す名詞の違いが、複数ある原典テキストをその性質により区別するものであるのかどうかを確認することにしよう。

## 2-1. maere

作品中、「物語」という意味で最も多く使われる名詞が *maere* である。用例は200を超えるが、その中でゴットフリートが「原典」もしくは「トリスタン物語」という意味で用いた例は約40例である。まずはプロローグ(v.1-244)における *maere* の用例を見ていこう。

私はそのような人々の気慰みにと力を注ぐことにした。彼らが私の *maere* で (*mit minem maere*) 心に迫る苦悩を幾分なりとも鎮め、心の痛みを和らげてくれるようにと。(v.71-76)

ゴットフリートはここで「私の *maere*」という表現を使っている。さらに彼は「トリスタン物語」の上位概念としての「恋物語」をも *maere* と表現する<sup>6</sup>。そして先に引用した原典探索を語る詩行の中では、これまでの「トリスタン物語」についての評価を以下のように述べる。

私はよく知っている、トリスタンについて語った者は多くいた。しかし彼について正しく語った者は多くはなかった。だがいま私が、この物語について (*von disem maere*) のそれらすべての語り気が気に入らないかのように申し述べるとするなら、それは私にとってふさわしい振る舞いとはいえないであろう。(v.131-139)

「私の *maere*」(v.73) は私の作品つまりゴットフリートの『トリスタン』を指すが、「この *maere*」(v.138) はこれまでに語られてきたトリスタンについての物語、つまり「トリスタン物語」を包括して指していると考えるのが妥当であろう。プロローグが終わり本論に入ると、*maere* は、冠詞を変えることによってさまざまな位相の「物語」を指し示すことになる。登場人物の消息を伝える話、真偽を問わず人々

が語る噂話、他の詩人の作品など。そしてその合間に「このmaereが教えてくれる」「このmaereが語るところによると」といった表現が現れるとき、それがゴットフリートが「原典」として参照した(具体的に言えばトマの)テキストを指すのか、ゴットフリート自身の作品を指すのかを区別するのが難しいことが多い。

われわれがこのmaere(daz maere)の語りで聞くように、ひとりの男と一人の女(ルーアルとフロレーテ夫妻)がその主君(トリスタン)をこれほどの愛情をもって育て上げたことは、後にも先にもないことであった。この同じmaereで(an disemselben maere)でわれわれはこれから、この忠実なる主馬頭がこの子のために、父としてどれほどの苦悩と難儀を味わうことになるか知ることになる。(v.1946-195)

(ともに刀礼式を迎える)仲間の支度とその身にふさわしい壮麗さをもって仕上がったところで、彼らの高貴なる盟主トリスタンに刀礼の身支度をさせるために、私はいかにして話を始めたらよいのだろうか。皆さまの耳に心地よく、またこのmaereにふさわしく(an dem maere)語りたいのだが、皆さまのお気に召して喜んでいただき、またこのmaereに(an disem maere)似つかわしく語るすべを、私は知らないのだ。(v.4589-4599)

このmaereが(diz maere)われわれに語るところによると(もしくは「語るように」)、トリスタンは海に面したあらゆる島々において、その勇敢さを知られていたのである。(v.18729-18732)

つまりゴットフリートの(そして当時の人々の)観念の中では、トリスタンを主人公として語られた／書かれた物語が、使用される言語や個々の語りの差異を考慮することなく、大きな全体として一つのmaereと認識されていたと考えられるのである。「このmaereによれば」といった言い回しでmaereが使われるとき、「このmaere」はトマのテキストであり、かつトマのテキストを「正伝」として受容するゴットフリートのテキストであり、その両者を区別するという考えは、そもそもゴットフリート自身にもその作品の読者にもなかった。現代的な意味で「原典」と「創作」が分離しているわけではなく、トリスタンについての物語という大きな伝統がmaereであり、その中でも誤った伝承を取り除いたトマの語りをより限定された「正しい」maereと同定するのがプロローグの役割なのである。

maereに対しjehe、sage、redeという、それぞれ「言う」を意味

7 jeheが5例、sageが4例に対し、redeは136例を数える。

する動詞jehen、sagen、redenから派生した名詞は、特定の人物の語りを指す場面で使われている。

そのような人、そのような人生に、私の語り (mîn rede) はふさわしくない。(v.55-56)

この物語について (von disem maere) のそれらすべての語り (ir iegeliches sage) が気に入らないかのように申し述べるとするなら (v.137-138)

ついにある書物で (an eime buoche) この物語 (dirre âventiure) がいかようであったのか、彼 (トマ) の語り (sine jehe) のすべてを読むことが出来た。(164-165)

つまり maere という物語の総体から、各詩人が抽出した表現体が rede、jehe、sage ということになるであろう。この中では rede の用例が最も多く見られる<sup>7</sup>。rede は他の詩人たちの語りに対しても使われ (ハルトマン v.4626、ブリッガー v.4713)、また登場人物たちの発言に対しても使われる。maere が登場人物の発言に対して用いられる際には、その発言の内容に重点が置かれている (例えばイゾルデの母の台詞「私はお前に良い maere - 竜退治をしたのは内膳頭ではない - をしてあげよう」(v.9311) や、トリスタンの台詞「私は皆さまに良い maere - 和解のためにマルケとイゾルデを結婚させる - を申し上げます」(v.10336) など) のに対し、rede はその話しぶり、または話すという行為そのものが意味を持つ場合 (例えば誘拐された若きトリスタンが巡礼者に対し節度ある立ち居振る舞い、発言をしたこと (v.2740) や、マルケ王が廷臣たちに、トリスタンに対し丁重に声かけをするよう求めたこと (v.3391) など) が多いと言える。

ちなみに geschicht (現代ドイツ語で「物語」にあたる Geschichte の古形) は、動詞 geschēhen (起こる、生じる) の意味合いを強く残し、「出来事、事情」という意味で使われるケースがほとんどである。唯一プロローグの中に

もしこの恋物語 (diz senemaere) の主人公たちが愛のために苦しみを、喜びのために愛の苦しみを背負わなかったとしたら、彼らの名前と geschicht はこれほど多くの高貴な心をもつ人々の慰めと救いにはならなかったであろう。(v.211-217)

という、「物語」考えることも可能な用例があるが、他の用例からみて「トリスタンとイゾルデの物語」を指すというよりは「彼らの身

に起こった出来事」と解釈する方が正しいと思われる。

8 *sin âventiure* (彼の *âventiure*)  
という表現は v.248, 344 にもある。

## 2-2. *âventiure*

*maere* と同じく「物語」という概念を指し示すのが *âventiure* である。当時の騎士物語、とくにハルトマン・フォン・アウエのアーサー王物語においては、騎士が名誉を獲得するための「冒険」という意味合いで使われた *âventiure* を、ゴットフリートはまず「物語」という意味で作品に導入する。トマは「*âventiure* の名人」(*der âventiure meister* v.151) であり、またゴットフリートが高く評価する詩人ハルトマンは「*âventiure* の精神」(*der âventiure meine* v.4627) を語りで (*mit rede* v.4626) 的確に言い当てる。さらにはゴットフリートが

ついにある書物で (*an eime buoche*) この物語 (*dirre âventiure*) がいかようであったのか、彼の語り (*sîne jehe*) のすべてを読むことが出来た。(v.164-166)

と述べる際の「この *âventiure*」は「この *maere*」同様に「トリスタン物語」のことを指すと考えられる。

トリスタンの父リヴァリーンの名が明らかにされる場面では

彼の名についてはこの *maere* がわれわれに教えてくれる。彼の *âventiure* は伝えている、彼の正しい名はリヴァリーンであり、別名カネーレングレスであった。(v.319-323)

と「彼の *âventiure*」という形でリヴァリーンについての情報が提示されており<sup>8</sup>、さらには

多くの者が、この騎士はローノイスの人で、ローノイスの王であったと言い、またそのように信じてもいるが、複数の *âventiure* で (*an den âventiuren*) そのことについて読んだトマは、彼がバルメニーエの人であり、あるブルターニュ人から新たに領地を与えられ、そのためにその人物に仕えていたのだと明言している。そのブルターニュ人とはモルガーンのことであった。(v.324-334)

とあるように、リヴァリーンの身分についてトマが調査した複数の *âventiure* が存在し、その結果多くの誤った情報を否定することが出来たことが示される。

9 中世から近世にかけてのHistoria概念については、Joachim Knappe: >Historie< in Mittelalter und früher Neuzeit. Begriffs- und gattungsgeschichtliche Untersuchungen im interdisziplinären Kontext. Baden-Baden, 1984. ゴットフリートのistôrjeについてはS.110ff.

10 中世ドイツ語の最も信頼すべき辞書であるBMZはゴットフリートの用例しか載せていない。

しかしトリスタンが成人した後は、「愛の洞窟について古来語られてきたâventiure」(v.17226)の1例を除いて、もっぱら運命、偶然、不思議といった意味合いで使われており、「物語」を意味する用例は「トリスタン物語」の前史に限られている。トリスタンの父親リヴァリーンに関する資料をmaereではなくâventiureとすることで、ゴットフリートが何らかの違いを示唆しようとしていたのかについては、さらなる調査が必要であろう。

### 2-3. istôrje

最後にゴットフリートがistôrjeを原典としてあげる箇所について検討してみよう<sup>9</sup>。フランス語文学の影響を大きく受けているドイツ中世文学において、フランス語の語彙は決して珍しくないが、istôrjeという語に関してはゴットフリート以外の詩人の用例はほぼない<sup>10</sup>。ゴットフリートも作品中この語彙を4例しか使っていないが、どのような情報がistôrjeの名の下に作品にもたらされているのか、以下詳細に見ていくことにする。

#### istôrje 1(v.450)

彼(リヴァリーン)は、名望がいよいよ高まりつつあるコーンウォールの若き王マルケがいかに雅で高貴であるか、たびたび聞いていた。マルケはコーンウォールとイングランドを領有していたのだが、そのうちコーンウォールは世襲の地であった。イングランドについては以下の事情があった。彼がイングランドを手に入れたのは、ウェールズのザクセン人がブリトン人を駆逐して、支配者としてそこに留まってからのことである。そのためブリトン人にちなんでブリタニアと呼ばれていたその国は名前を失い、ウェールズにちなんでイングランドと呼ばれるようになった。さてその地を手に入れ、山分けにした後、ザクセン人たちはみな王となり、独立したいと望むようになったのだが、それが彼らの不幸の始まりだった。彼らは戦い、殺し合い、ついにはその身と領地をマルケの保護に委ねることになったのだ。それ以来イングランドはマルケに対し、いかなる国もその王にこれほどよく仕えたことはないというほどに恭順の意を示したのである。またistôrjeが伝えるところによれば、マルケの名を知る隣国すべてにとって、マルケほど素晴らしい王はいなかったとのことである。(v.420-453)



istôrje 2(v.5880)

当時アイルランドの王であったのは、私が istôrje で読み、また正しい maere が語るように、アフリカ生まれの傲慢王グルムーンであった。彼の父親はその地の王であり、その死後、国は彼とその弟の共同統治となった。グルムーンはしかし野心に燃え、誇り高くもあったので、誰かと領地を共有することに我慢がなかった。ただ一人の支配者とならねば気が収まらなかったのである。そこで彼は強力かつ勇敢、戦って負けなしという勇者たちを、財宝と宮廷風の心ばえでもって部下として選び抜き、国は弟に譲ってやったのである。こうして彼はすぐさま出発し、権勢を誇る名高きローマ人たちから許可と保証を得た。つまり彼が武力で手に入れたものは、その中から幾ばくかの収益と権利をローマ人に献上すれば、後はすべて自分のものとしてよい、というのである。もはや一刻の猶予もなく彼は強大な軍勢を引き連れて陸を行き海を渡り、アイルランドまでやってくる勝利を獲得し、武力でもって否応なしに、自分を王として戴くよう強制した。それ以来アイルランド人は常に戦って、グルムーンが隣国を征服するのを助けたのである。このようにしてグルムーンはコーンウォールとイングランドをもその手に収めたのだが、当時マルケはまだ幼く、子どもだったので抵抗するすべもなく、その権力を奪われて、グルムーンに貢ぎを送ることになったのである。(v.5879-5930)

istôrje 3(v.15915)

真の istôrje がトリスタンの剛勇についてわれわれに語るところによると、同じ頃ウェールズの国に傲慢不遜な一人の巨人がおり、海沿いに居を構えていた。その名は毛むくじゃらウルガン。この巨人にギラーン公とその領国ウェールズは臣従し、民に危害を加えず生命を安んじてくれるようにと貢ぎを納めねばならなかった。(v.15915-15927)

istôrje 4(v.18692)

さてブルターニュとイングランドの間に、ある公国があった。アルンデルという名で海に面していた。そこには勇敢で雅で、そしてかなり高齢の公がいたのだが、istôrje が語る所によれば、隣接する諸国がその公の領土を荒らして奪い取っていた。彼らは陸でも海でも公を圧倒した。公は防戦を試みたが、無駄に終わった。(v.18686-18699)

istôrjeの用例は少ないが、その名の下に開示される情報が、明らかに一つの共通する特徴を持っていることが読み取れる。これまでゴットフリートが原典に対して使ってきたmaereやâventiureとは異なり、istôrjeが伝える情報は、主人公トリスタンとイゾルデ(そしてその先触れとしてのリヴァリーン)の運命とは直接的には関係のない事柄についてのものなのである。

第一の用例では、ブリトン人を追放したザクセン人が仲間割れした結果、マルケがコーンウォールとイングランドの両国を領有することになった次第、第二の用例では、アイルランド王グルムーンの出自とローマへの臣従、またマルケがグルムーンに貢ぎを送り臣従することになった次第、第三の用例では、ウェールズが巨人ウルガンに臣従することになった次第、第四の用例では、アルンデル公国が隣国から侵攻を受けていることが、それぞれistôrjeからの情報として示されている。つまりゴットフリートがistôrjeを原典として伝えているのは、「トリスタン物語」が展開する世界に存在する国同士の争い、国際関係についての情報なのである。国と国は「貢ぎ」という形で互いに上下関係を持って結びついており、その不公平な関係性を打破しようとする試みは脇筋としてトリスタンとイゾルデの恋物語とパラレルに並べられ、政治的な思惑の絡み合う中、恋物語も進展していく。宮廷内の反対勢力による妬みそねみ、そしてそこから生じる奸計は、「トリスタン物語」に内在していたものとしてmaereがその「真実性」を担保する。しかし読者にとっての現実世界に存在しているコーンウォール、アイルランド、ウェールズといった国同士の関係は、トマそしてゴットフリートが「トリスタン物語」以外の参考資料として読み込んでいた「あらゆる君公の生涯」(v.158)についての書物、つまりistôrjeが伝えるものとして物語内に導入され、別のジャンルから彼らの語りの「正しさ」を支えているのである。

この物語の構成はクレティアンが創造した「アーサー王物語」とは大きく異なっている。「アーサー王物語」は詩人が語り読者がそれを受け取る「現在」と、語られる理想的な「過去」の二つの時間層しか持っていない。詩人はアーサーおよび円卓の若き騎士たちが理想の騎士社会のあり方を模索した輝かしい過去を、さまざまな問題を抱えた現実と対比し、世相批判という色合いを込めながら語る。しかしそれ自身が過去を持たず、歴史の中に確かな位置づけをされることのない理想的な過去はともすれば現実離れし、「むかしむかしあるところ」というメルヘンの世界へと入り込みつつあるといえる。これに対し「トリスタン物語」には主人公が活躍する過去の時代と、物語を詩人が語り読者が受け取る現在、そのほかに複数の「原典」が語る重層的な過去が存在する。重層的な過去とは、近くは物

語内の状況を作り出した複雑な国同士の関係であり、さらに遡れば物語内現在に登場する半ば道化的な巨人ウルガンとは異なる、巨石文化を担った太古の巨人の時代であり<sup>11</sup>、さらにはギリシアとの戦いに敗れてはるばる巨人たちが支配していたこの島に渡ってきたトロイア人たちの世界にまで広がっている<sup>12</sup>。そういった「真実」の歴史の中で、その歴史に翻弄されながら恋の人生を全うするのが主人公トリスタンなのである。トリスタンとイゾルデの愛が「真の愛」であると同時に、ゴットフリートの語りも「真の物語」であり、そして語りが「真」であるというのは、さまざまなエピソード（アーサー王も含めて）が入り込んで雑多なものになってしまった「トリスタン物語」から「真実」と確認できることのみを抽出して構成したという意味であり<sup>13</sup>、また主人公たちが生きた物語内世界がフィクションではなく史実であるという意味でもあるのだ。

11 「愛の洞窟」を作ったとされる巨人族。『トリスタン』v.16689以下。

12 コーンウォールの建国の祖クリネウス。『トリスタン』v.16691。

13 例えばゴットフリートは、俗人本系「トリスタン物語」に登場する「つばめのエピソード」を取り上げ、「maereが混乱している」(v.8615)と批判している

### 3. 最後に

冒頭プロローグにおける原典言及のみならず、作品のあちらこちらに「原典によれば」という決まり文句を挟みつつ、自らの語る「トリスタン物語」が語りの伝統の中から「真実」を拾い出して編み上げられていることを主張し続けるゴットフリートは、ついには原典というテキストの形ではなく、自らがその身をもって伝説の場を訪れたという、実体験によって物語の真実性を証明することになる。

これらのこと（「愛の洞窟」についての詳細）を私はよく知っている。なぜなら私はそこに行ったことがあるからだ。（中略）私は洞窟で取っ手と掛け金を見つけ、水晶の寝台へも何度か近づき、あちらこちらへと踊るように跳び回ったものだ。決してその上で休むことはなかったのだけれども。寝台の周りは堅い大理石で出来ていたが、私があればほど踏み回ったのだから、もしもその大理石の最大の美德である緑、それによって大理石が常に育っていくあの緑の色が守りとならなかったなら、今でも真の愛の痕跡がそこに認められることだろう。私はまた輝く白壁でこの目を憩わせ、丸天井と要石を熱心に見つめ、賞賛の星々をちりばめた装飾に目を凝らしたものだ。陽光を通す小窓は私の胸にその輝きを注ぎ込んだ。(v.17100-17135)

トリスタンとイゾルデが宮廷を離れて理想の生活を送ったという「愛の洞窟」を、ゴットフリートが自ら訪れ、その目ではっきりと、内部に至るまで確認したというのである。詩人の目撃情報、これほど

14 ジェフリー・オブ・モンマス『ブリタニア列王史』瀬谷幸男訳、南雲堂フェニックス、2007。

確かな「実在証明」があるだろうか。

ところがゴットフリートはこの一連の目撃証言を次のように締めくくる。

私は11歳の頃からこの洞窟を知っているが、コーンウォールには行ったことがない。(v.17136-17138)

ここで読者は途方に暮れることになる。なぜなら「愛の洞窟」を巡るこれまでの記述は、洞窟がコーンウォールのどこかにあることを示唆していたからである。まずこの場所はコーンウォールのマルケ王の宮廷から二日間の行程にあるといわれる(v.16682)。以前トリスタンが馬で狩りに出かけたときに見つけた(v.16687)というのだから、荒野と森を通る(v.16681)としても距離的にはさほど離れてはいないであろう。そして洞窟の由来はというと「コリネウスの時代より前、巨人がこの地を支配していた異教時代に険しい山中に掘られたもの」(v.16689-16693)である。もし読者が、当時広く知られていたジェフリー・オブ・モンマスの『ブリタニア列王史』を読んでいたら、ブリタニアの建国の祖ブルトウスとともにブリテン島に上陸したコリネウスが領有し、自らの名を取ってコーンウォールと名付けたこの国に巨人族が多く住んでおり、コリネウスと格闘したり退治されたりしていたことを知っていたことだろう(『ブリタニア列王史』第1巻第15章)<sup>14</sup>。コリネウス、巨人族という名称は、洞窟がコーンウォールに存在していたことを、読者に強くイメージさせたはずである。これまでのエピソードがイングランド、アイルランド、ブルターニュなど実在の場所を舞台として繰り広げられ、主人公が移動する際にはその間を船で航海したことが必ず指摘されるという、現実に即した舞台設定がなされる中、読者はこの「愛の洞窟」もまた実在の場所であるという前提で読み進めるはずである。このエピソードで作品に初めて登場する空間のアレゴリー的解釈は、読者を多少戸惑わせるかもしれない。しかしそのすぐ後に詩人の目撃証言が続くことによって、読者は再び洞窟の実在を確信し、かつてそこで時を過ごした巨人族、トリスタンとイゾルデ、そして詩人という洞窟の歴史を読み取ることになるのである。ところがそこまで読者を洞窟の実在に引きつけておいて、ゴットフリートは最後の三行で、そこが読者が想定するような「コーンウォールのどこか」ではないと宣言し、読者を置き去りにするのである。

ここで読者は二つの選択に迫られることになる。あるタイプの読者は「コーンウォールに行ったことがない」という詩行をとりあえずなかったこととして、なおも洞窟をトリスタンとイゾルデが追放されたコーンウォール宮廷と地続きの場所としてイメージし、トリ

スタンとイゾルデの幸せな営みの描写へと目を向けていく。時を置かずしてマルケ王がやはりコーンウォール宮廷から狩りにやってきてこの洞窟にたどり着くのであるから、このタイプの読者は何事もなかったかのようにトリストアンとイゾルデの恋の物語の流れに身を任せることが出来るであろう。

しかしあるタイプの、より高度な読解能力を持つ読者は、「洞窟に行ったことがあるが、コーンウォールには行ったことがない」というゴットフリートの謎かけに、この空間がこれまでの物語の舞台とは異なる性格を持つものであることに思いを馳せることになるであろう。この空間の特徴はアレゴリー的解釈が施されることだけではなく、時間の流れがないということである<sup>15</sup>。同じ「トリストアン物語」でも俗人本系のベルールやアイルハルトは、宮廷を追放された恋人たちが荒野でまともな食事を取ることもままならず、衣服もすり切れてボロボロになっていくという時間的推移を、それにもかかわらず心変わりしない恋人たちの「真の愛」の表れとして描写していた<sup>16</sup>。それに対しゴットフリートは、恋人たちが互いを見つめる眼差しから食物を得ていたとする「奇跡の食事」について言及し<sup>17</sup>、時間の経過とともに彼らに訪れたはずの変化を予め回避することによって、時の流れそのものを止めてしまう。主人公の両親の出会いに始まるゴットフリートの『トリストアン』は、istôrjeつまり史書から登場人物を借りてくることにより、さらに時間を遡り、アーサー王を過去の人物として同定し<sup>18</sup>、さらにはコーンウォール建国の祖コリネウスの名を出すことにより太古の巨人時代、また遙かにトロイア戦争が行われた古典ギリシア時代までを射程に入れて、綿々と続く歴史の流れの中にトリストアンとイゾルデを位置づけている。複数の原典の存在を繰り返し指摘することにより、時と場所を特定しないアーサー王物語群とは異なる「歴史小説」としての特徴を強く打ち出してきたゴットフリートがここで、「時の流れない世界」として洞窟を描こうとしていることに、この第二のタイプの読者は改めて注意を払うことになるであろう。ゴットフリートはこの洞窟世界を理想の「真の愛」の世界として、現実の宮廷世界とは異なる次元に置いている。それはプロローグで示された、真の恋人たるトリストアンとイゾルデが死した後もなお生きてあるという、時間を超越した状態を言い表す表現を思い起こさせる。

彼らの死は世の人のため長く生き続け、誠を求める者には誠を、誉れを求める者には誉れを与えるであろう。彼らの死は永遠に、我ら生きてある者にとって生き続け、さらに新たになるであろう。なぜなら彼らの誠、その誠の純粋さ、彼らの恋の喜びと苦しみ、それらはすべて高貴なる心をもつ人々にとっての

15 Jan-Dirk Müller: Zeit im Tristan. In: Der »Tristan« Gottfrieds von Straßburg. Hrsg. von Christoph Huber und Victor Millet. Tübingen 2002. S. 379-397.

16 ベルール『トリストアン物語』におけるモロワの森のエピソード。

17 v.16807ff.

18 istôrje2のアイランドの傲慢王グルムーンが、『ブリタニア列王史』第11巻第8章に登場するゴルムドゥス(アフリカ人の王でありアイランドを征服した)とするなら、アーサー王はすでにこの世を去っていることになる。ゴットフリートは俗人本系の『トリストアン物語』とは異なり、トリストアンがアーサー王宮廷を訪れるエピソードを採用していない。

パンであるのだ。こうして彼ら二人の死は生き続ける。我らは彼らの生を読み、死を読む。そしてそれはパンのごとくに甘やかである。彼らの生、彼らの死は我らのパン、かくして彼らの生も死も生き続ける。彼らは死すとも、なお生きてあり、彼らの死は生きてある者のパンなのである。(v.224-240)

ゴットフリートの「コーンウォールに行ったことがない」という謎かけから、時間を超越した現実とは異なる次元に位置づけられた洞窟の真の姿を読み解くことの出来るこの第二のタイプの読者こそ、プロローグでゴットフリートが想定した読者、つまり「高貴な心の持ち主」(diu edelen herzen)なのであり、「奇跡の食事」と「パン」というキーワードとともに、「愛の洞窟」とプロローグが結びつけられるのである。

複数の、性格の異なる原典に言及することにより、物語の「真実性」と「歴史性」を読者に示したゴットフリートは、原典テキストによる真実性の担保から一步踏み出し、自らの目撃証言という誰もその真実性を否定することの出来ない証拠をもって「愛の洞窟」の存在を読者に提示する。しかしその意図するところは「洞窟の實在」ではなく、現実世界には存在しない異次元の洞窟の「實在」を物語世界に組み入れることであった。理想の世界を過去の時代に想定し、いわゆる「昔日礼賛」を行うのではなく、別次元の現実として提示し、さらにその「實在」を目撃証言つまり自らの身体により証明するというアクロバティックな詩作を編み出したのはトマなのかゴットフリートなのか。ゴットフリートの「愛の洞窟」に対応するトマのテキストが現存していない以上、確定することは不可能だが、とりあえずこれをゴットフリートにおける特異な原典言及のあり方と結論づけておくことにしたい。